

「春の歌」(草野心平)の授業

前から一度授業してみたいと思っていた詩「春の歌」をやりました。これは自分でもかなり力を入れて準備しました。やってみると、予想以上に楽しい授業になりました。それで、うれしくて、きちんとした記録にして残しておくことにしました。

私の読み

春の歌

草野心平

ほっ、まぶしいな。

ほっ うれしいな。

みずはつるつる

かぜはそよそよ。

ケルルン クック。

ああいいにおいだ。

ケルルン クック。

ほっ いぬのふぐりがさいている

ほっ おおきなくもがうごいてくる

春を賛美する歌。蛙の歌う歌。

驚き 地中からひよこつと顔を出した瞬間思わず声が出る。真つ暗な地中の世界にいた蛙には目もくらむ眩さ。しかしこちよいまぶしさ。

緊張がとりそのぞかれて安心するようす。体全体を地面の上に出して。独り言。喜びを自分でかみしめるように。

やつと地上の広い世界へ出てきたんだなあ。何ヶ月も地中の暗闇のなかで。じつと動かさず、沈黙の世界でまぶしい明るさがうれしい。一人ぼっちでいた蛙。地上に出られる日をひたすら待っていた。水はつるつると流れ。そよそよと柔らかい風が吹く世界―地上世界を実感

物の表面がなめらかな様子 表面がなめらかな物にふれて人・物などがよく滑る様子水の表面がなめらかに光っている。川底の石をつるつる滑るように流れている。(こちよい動き)あの水の中にとびこんだらさぞかし気持ち良からう。

風が静かに柔らかく吹く  
秋のあの肌をつきさすような風ではない。やわらかく、心地好い風。ほんとに春だなあ。

地上の空気をむねいっばいにすいこんで一声鳴いてみた。

春のいろんな花の匂いが体にしみこむように。久しぶりにかぐ。地中のしめっぽい匂いと何という違い。喜びがまた一段とふくらむ。  
「いいなあ。うれしいなあ」という歓声。

うれしい発見。懐かしいものにまた出あったよろこび。

また別の新しいものに触れた驚き

ケルルン クック。  
ケルルン クック。

体中にこみあげてくる喜びを高らかに歌い上げている。  
なんとという素晴らしい世界だ。穏やかな中に命の満ちあふ  
た世界その中でこれからずっと暮らしていけるんだ。春  
の世界に自分も溶け込んで一体となっている。

【この授業での私の課題】

- ◎この詩を外から分析的、説明的に読むのではなく、子どもたち自身が蛙になってここに描かれている世界を実感していくような読みにしたい。
- ◎子どもが読み味わうような授業の展開にしたい。教師の発問で展開させるのではなく、あくまで子どもがこの詩から読み描いているものから出発して、それをより鮮明で具体的なものにしていく、また一人の読みをみんなに広げるために教師が援助の手を入れていくという姿勢を大事にしたい。

授業展開の構想

◎（詩は全文板書しておく。）

1 まず前文を読んで、この詩は冬眠からさめた蛙の詩だということを説明。

無駄を省いて、できるだけ直截にこの詩の世界に立たせたい

「作品との出会い」

2 何度か声を出して読ませてみる。（各自で自由に）

・この時、さまざまな疑問や感想をつぶやく子がいるかもしれない。  
それは、板書で書き留めておいたり、みんなにひろめたりする。但しここでは深く追求することは避ける。

・読みの力のよわい子に読ませてみる。（読み下しにくいところはどこかさぐる。）  
・また各自で読む。

「全体の印象をさぐる」

3 みんなはこの詩を読んで、どんな感じがした？  
楽しい、おもしろい詩だなあ、て思ったか。変な詩だなあって思ったか。

・全体の印象を聞いてみる。  
・とても楽しい感じがする。  
・ケルルンクックて言葉がおもしろい。  
・ほっがいつぱい出てくるからおもしろい。  
・何だかまだあまりよくわからない。（どんなところがよくわからない？と探りをいれる。）

4 この詩を読んでいると、どんな蛙の姿がうかんでいるかな。  
ここのところから、こんな蛙の姿がうかんでくるなあ、というのを出しあってみよう。

（少し時間をとってひとり読み。線を引かせたり書き込みさせて、自分の読みをつくらせる。）

・「ほつまぶしいな」てびっくりしてるん。初めて外へ出てきたで。（そのところ、ぼくもよく似たこと考えた、という人ある？という形で発言を引き出し、広める。）  
今まで真っ暗のところにいたでや。

（その時、びっくりしていやな顔になってる？などと子どもの発言の中身を具体的なものにする問いを入れたりしながら深める）

・「うれしいな」ていうのも、今まで地面の中でがまんしてたで。外へ出たら自由に動き回れるでやっとなられたな、て「ほっ」としているん。

・「水はつるつる」て光ってるのちがうかな。

「つるつる」てすべるみたいに流れていると思う。

水にさわって、つるつると水がくすぐるみたいで気持ちよいのかもしれない。

・「ああいおいだ」てにこにこして言っている。しんこきゅうして。

いぬのふぐりのおいがしている。

もっといろんなものにおいもしているんちがう。さくらとか、たんぼぼとか。

(今まで土の中にいたときはどんなにおいだったんだらうね。)

◎その他、子どもたちのイメージをふくらませる問いとして用意しておくもの

・この蛙はじつとして言っているのか、動きながら言っているのか、

・「ほっ」が4つあるが、どれもおなじだらうか。ちがうだらうか。どっちがうだらう。

・それぞれの「ケルルクック」を、人間の言葉に直したら。

5 蛙になって朗読してみましょう。

### 【授業記録】

T 詩を板書 その間各自読み

洋志を指名して読ませる。

龍法 前文を読む

T わかるね。かえるは冬の間どうしてるの

C 冬眠しとるの

T 冬眠してるんやね。冬眠てわかる？

C うん。土の中におるの

T 土の中でじつとしとるんやね。で、春になると土の中から出てきますね。その土の中から地面の上に出てきたその初めての日の歌ですよ。はい、そういうつもりで何度も読んで、どんなかえるの姿がうかんでくるかな。自分の頭でうかべながらもう 何回かよみなさい。

C 子どもたちめいめいで読んでいる

T はい、だいたい読めましたか。じゃ、だれかに読んでもらいましょう。だれか、読んでみようという人ありませんか。

C ……

T じゃ、直也読んでくれる。何か浮かんできたって言うてたから。

直也 読む

(ほっ、にと感情あり。最後はしぼむ)

T 1回目からよかったね。どこがよかったかわかる？

詩を板書したのは、話し合う時、いつも詩の言葉とつなげて考えさせたい、みんなの意見を出し合う土俵の役割を持たせたいと思ったからである。

この詩はかえるの詩であることを最初にみんなで共通理解させておこうという意図。

少し読みに表情が出てきた。

まず、音読させて、詩の言葉の持つ感じをぼんやりとでもイメージ化できればよいというつもり。

大裕 ほっ、まぶしいなと、ほっ、うれしいなところがよかった  
勝仁 ぼくはケルンクック

T どのケルンクック？

勝仁 全部

T 全部よかった

智将 ちよつと後のはおしかった。

T じゃ、今のを聞いてもう一人読んでもらいましょう。

はい、こんどは祐子さん。さっきの直也君とまたちがういいところがあるかなって考えながら聞いて下さい。

祐子 読む（全体に喜び・驚きの感情がよく出ているいい読み）

T ほう、どうですか。またさっきのとずいぶんちがったね。

C いいなおいだのどこ

T ああいいにおいだ。それから

C ケルンクック

T 最後のケルンクックがさっきの直也君のはしぼんだけど、何かたのしそうに感じて読まったね。

勝仁 水はつるつる

T はい、もう一人読んでもらおう。今度は西津君

西津 読む（はつきりした読み。まだ感情は入り切らない）

T はい、じゃ、みんなもういっぺん読んでください。

C めいめいで読む

T はい、もうすでに5回も6回も読んだね。

じゃ、最初、この詩ばつと読んでどんな感じがしましたか。

はい、公美さん。

公美 ケルンクックのクックでかえるがわらっている。

T ほう、ケルンクックがわらっているような感じがする。どのケルンクック？

公美 全部

T ああ、これが笑っているような感じがしたんだ。ふうん。

はい、そんなふうに、ぼくこんなこと感じたというの出して。

はい、朝子さん

朝子 くーちゃんのいわったケルンクックという笑いは、  
一つにまとまってるんと、ところどころにあるから、うれしさが

がときどきぱつ、ぱつと出てくるような感じ。

T おもしろいこといわったね。なんていわったかわかった？

大裕 はい、ぼくわかった。あのな、時々きえたりするさかい、

T うん。なんかぼつんぼつんでくるから、そのたんびにうれしさがむくつ、むくつ、てわいてくる。そんな感じがする、ていうてやるんやね。おもしろいね。

他に。はい、なつ希さん。

なつ希 ほっ、いぬのふぐりがさいている、のところで、なんか

かえるがびっくりしてるわうな感じがする。

T ほうれ、すごいこというね。この「ほっ」でなんかびっくり

この詩は基本的には音読で楽しむ詩だと思う。だから、少し新しい内容が入ったら、また声に出して読んでみる、ということを意識してやっている。

ばくぜんとした印象でよいから、子どもたちがどんな感じ方をしているのかさぐろうと思った。

子どもはもつと具体的なかえるを思い浮かべている。

ここは、一人の発言にあまりこだわらないで、一人ひとりが感じたものをいろいろ引き出そうという気持ちでやっている。

朝子の読みは非常におもしろいので、ほかの子にも広げようとしている

してるような感じがする？ふうん。  
はい、他・優子さん。

優子 ほっ、のところ、なんかとんでるような感じがする。

T 飛び回っているような感じがする？どの「ほっ」が？  
全部？（うなづく）

みんなもそんなふう思った？（つぶやき）

T 「ほっ」が、ここにもあります。ここにもあります。（板書の詩に線を引く）

優子さんは、ほっ、てとびあがって喜んでるのかびっくりしてるのかしらないけど、そんな感じがするって。

C ちがう

T ほう、また違うこと考えた人ある？大裕君

大裕 水はつるつるとか、ようじろじろよう見ながら言うてる

T 水はつるつる。よう見ながら…：へえ。

大裕 そよそよとかも

T これも？なんやて。じつとみてやる？

大裕 うん、もつとあるよ。くもがうごいてくるとか。

T くもがうごいてくる、とかもじつとようみてやるような気がする（うん）ほう。

政義 冬の間な、そんなくもとか、水たまりとかいつこもみてへんさかい。

T おっ、今なんかすごいこといったぞ。

今の聞いてた人。

C あんまり聞こえへんかった。

T ちよつと政義君の聞いたって。

政義 冬やったでな、土の下で生活してやったんやで、空とか水たまりとかいつこも見てへん。

T いつこも見てへん。…：だから

政義 だからじつと見ている。

T ほう。

C （口々に語り出す）めずらしい。なつかしい。

T 今のでわかってきた、という人言ってください。はい、西津君

西津 もう冬がすぎて、久しぶり。地上に出るのが。

T ずうつと地面の中にいて、久しぶりに出てきた。だから、

めずらしいし、…：直也、何て言った？

直也 あんな、なつかしい。

T うん、わかるわかる、いう人。勝仁君。

勝仁 ちよつとわからん。

直也 あんな。前は陸で生活してやってな、冬にだんだん寒くなってきたさかいな、土の中にもぐってな、生活してやってな、

また春がきたのでできたらな、なつかしい。どこも何もおんな

じやったん。前と。

T ほれ、直也は今こういうこといつてるのね。土の中に入る前  
去年の春とか夏にくらしてた（大裕思い出しとるん）

それを、久しぶりに出てきたときに、ああ、なつかしいな。

前とおんなじだなって見ている。うん。おもしろいね。

朝子さん。

朝子 えっと、土の中は暗いのに、おひさまとかが光ってて、す  
つごく明るいところで、ほっ、ていうのがほんとにびっくりし

発言を聞いているほかの子への  
意識

この大裕の発言が一つのきっかけ  
を作る。

大裕の発言をうけて、ここで政義  
がぱつと発言しだす。  
・冬眠中のくらしを思い浮かべて  
いる。

ここで、かえるの状況が学級全体  
に広がる。

冬眠前のくらしにまた出会えたな  
つかしさをとらえている。

土の中のくらしをふまえて「ほっ  
」の驚きの感情を語っている。

たり、じつとみてるというのは思い出しながら、あつこんなことがあつたんやな。というような。

T ……はい、智将君

智将 前から地上にいたんやったらほつ、とはいわないけど、出てきたばかりだから、まぶしかったり、水がつるつるしてたからびっくりした。

T ほう。……ずっと地面の中におったから、一つひとつ見るものが、びっくりしたり、めずらしがったりしているんだ。みんな、だいぶんわかってきた？どうですか。今の友だちの聞いていて。ほういうと、なんかびっくりしているような気がするなあとか、そんな感じがするなあというところ見つかる？みんなにも。

はい、じゃ、そういうことを頭において、もう一ぺん自分で読んでください。ここからはどんなかえるがうかんでくるか。もつとくわしくうかべてみましょう。

C 読む

T はい、ちよつとやめて。政義君、何か言いたいことがあるの政義 ああ、いいにおい、ていうところだな、土の中ではそんないいにおいしんかったでな。ほんでびっくりしてな、こんないいにおいがしてたんかって知らなくてやったん。

治武 ほこである。

T せっかくいいこと言うてやるんやで、ちゃんと聞いたって。今のわかった？

邦臣 うんわかった。土の中やったらにおいがとどいてないのに地上に出たらにおいがぶんぶんする。

直也 何のにおい？

勝仁 はい、何のにおいかいいたい。あんな、花のにおい。

C 春のにおい

C 空気のにおい。

T はい、宣彦君、なんて言ったの宣彦 春のにおい

T 春のにおい。また、むずかしいこといったぞ。

花のにおいと春のにおいとちよつとちがうけど。

花のにおいだけじゃなくてどんなにおいがしているんかね

C 空気のにおい

なつ希 空気が変わったみたい。

T 今まではどんなにおいの中にいたの。

C ……

直也 くさいどぶみたいなのにおい

T 土の中でおいはあつたのかね。(勝仁 土のにおい) 土のにおいだけやったんやね。そういう中はずつとおったのが、ぱつと出てきたから、地面の上の世界のいっぱい春のにおい**が**いいにおいだなあって。

直也 うれしいなあって。

T ほう、すごいね。

じゃ、そういうのをに入れて誰かもういっぺん読んでみましょう。いいにおいだのところ、気持ちちがもってきますね。

かなり詩の世界に触れる発言がでてきたので、いったん各自読みにもどして、さらに新しい読みを見付けさせたいという意図で。

いつもはそう積極的に発言しない政義だが、読んでいて次々とイメージがふくらんでくるのか、勢いこんで手を上げている。

話の途中でしゃべりだすから制する。

このあたり、自分たちでイメージを楽しんでいる。

ああいいにおいだ・のうらがえしものとして土の中のおいは、と尋ねたのだが、子どもには唐突だったか。

いいにおいだ、という言葉にこもるかえるのうれしさを直也は感じている。

読みを朗読につなげる。

えー、じゃ、かずき君読んでくれる。

和樹 読む

T ああ、よかったねえ。

C 全部よかった。

C ああ、いいにおいだのところがよかった。

T ほっ、何かかびっくりしたような感じがあったね。はい、

ああいうのを聞くと、おまんらかて、もういっぺんさきつの朗読よりもっとよくする。自分の読みも変えてみましょう。

C 読む

(読んでいるとちゅうで政義が手をあげる。)

T 政義君すごいねえ。みんなもまた浮かんでできますか。

政義 土の中やったら花とか見られんかったけど、地上に出てきたら、花とか見られるでびっくりした。

智将 ケルルンクツクのクツクは何かうれしそうなかんじ。

勝仁 ケルルンクツクはな、かえるがゲゴゲコ鳴いとる。

T うん。ゲゴゲコうれしそうに鳴いてる。

はい 明代さん。

明代 ああいいにおいだの後にケルルンクツクで書いてあるからいいにおいがしたらうれしいから

T 今明代さんのいわったのわかる

直也 ああ、いいにおいだ、とケルルンクツクが線で結ぶみたい

T これとこれとが関係あるってだけか、もうちよつと言える人ない？

大裕 うれしいさかいにケルルンクツクていわるん。

朝子 ほっ、まぶしいなとかかいたるから、今初めて地上に出て

きた一番初めの時だから、びっくりしたり、うれしかったりしてるんやと思う。

T いいにおいだなあってうれしくなって思わず鳴いた、っていう感じかな。そういうことでもいいかな。

はい、優子さん。

優子 ほっ、まぶしいな。のところで、冬の時は暗い土の中で、すごしてたけど、きゆうに外に出てあかるかったさかいに、びっくりしたように、きゆうに明るくなったから、ほっ、まぶしいなって。

T (他の手を上げている子を制して) はい、ちよつとここで考えましょう。もう少し、みんなの浮かべている絵をもっともつとかえるの絵が浮かぶようにしましょうか。今の「ほっ、まぶしいな」のところでこんなかえるがうかんでくるなあっていうのありませんか。

なつ希 何か、かえるがずっと冬の間ずっと土の中にいたから暴れもできなかったので、なんか、出てみたら、まぶしくて、暴れてもまぶしくてまぶしくてたまらない。

T うん。まぶしくてたまらない。

「ちよつとみんなに聞くけど。いま、この「ほっ、まぶしいな」て言うたとき、かえるはどこにいますか。

みんなの学習にもどす。

政義には、地中の生活のイメージがかなり強く入っているようだ。

ああいいにおいだ、でふくらむ喜びの感情がケルルンクツクという鳴き声で表出されているという読み

ここまでは、ずっと子どもたちの発言を受け止め、広げるという対応できた。しかし、やや同じような読みで、発展性がなくなつて

C 外！地上

T 地面に……もう出てきた？

C うん出てる。

C 顔だしてるぐらい

T どんなかえるがうかぶ。由美子さんは、どこにいるかえるがうかぶ？

由美子 頭をちよこつと出してる

T 地面からちよこつと出してる。西津君は？

西津 うんとな、ちよつとだけ頭だしてる。

T 悟司君は？

悟司 ちよつとだけ頭出してる

直也 先生、ほくちがうと思う。ぼく見たんやけどな、畑に冬眠しとるかえるがおつてな、ほんでな、上にちよつとだけ土がのせたったさかいな。ほこからみとつた。

T うん。なるほどね。なんでそんなふうに思ったのか言ってくれる

智将 ほつ、まぶしいなていうところで、もう出てしまっうまでに、もう顔は出てるから

朝子 まだ、ちよつとだけ目が出てるから、なんか、頭がちよつとだけでてるから、あんまりはわからないけど、何か急にキラ光ったおひさまが何か入ってきたから、きゆうにほつとまぶしいな。

T 土の中から、土をやぶつてぽこつと出たらパアツときたから ほつ、まぶしいなあ、ていう感じ？

直也 あつ、あんなあ、「手ぶくろを買いに」みたいなこと。

T 何？どういうこと？

直也 あんな、どうくつから、暗いさかいにな、行ったら雪がきててな、反射してピカツと光つて、ワアツてなつたみたい。T わかった。思い出した？ 去年あつたよね。手ぶくろを買いにで、ほらあなからでようとしたら急に光つて、あの感じに似てるなあ、ていうのね。ほんで、政義君何が言いたかったの 政義 土の中にずつともぐつてたけど、急に上に上がって地上に 出たら、きゆうにお日さんの光が当つて。

宣彦 土の中は暗かったけど、地上に出てからいきなりまぶしか つたから、うれしかった。

T なるほどね。ほど、このまぶしいのは、ああいやだなあ、じ やなくつて、まぶしいけれど、そのまぶしさがうれしいの？ ほう。

朝子 私は「ほつ、まぶしいな。」のところで、ちよつとだけ目 が出てるから「ほつ」というのがつくんだと思う。

T どういうこと？

朝子 えつと、出てたら、ふつうの「ああまぶしいな。」という 感じだと思うけど、頭を出したらキラツときたから「ほつ、まぶしいな」て感じるんやと思う。

T 公美わかった？「ああまぶしいな」じゃなくつて「ほつ」という言い方が、今何ていわったのかな。もういっぺん言つて。朝子 ああ、だったら安心して感じるやけど、ちよつとだけ出 してるから「ほつ」てびっくりしながら、こんなにまぶしか つたんかと思ってるような感じで言っている

治武 わかった。あつ、やつたらなんか安心してけるけん

きたので、こちらから問いを出して、より具体的なイメージを引き出そうという気持ち。

今まで発言していない子を話し合  
いの場に参加させようという意識  
が働いている。

直也のこういう感覚的にとらえる  
力はすごいなあと思う。

子ぎつねの場合とちがって、かえ  
るにはこのまぶしさがうれしいも  
のなのだというとらえかたは大事  
それを宣彦が出してくれたので補  
強している。



どな「ほっ」やったらなんか、こんなにまぶしかったんかっていう 感じ

優子 「ほっ」のところで、やっと暗いところではなくて明るいところへ出られたから、ほっと安心してるような感じ。

T これは、驚きだけじゃなくって、ああやっと出られたという 気持ちもある。はあ、そんなふうに言うてやるね。

C ぼくも！

直也 その時、ほっててな、やっと出られた。

T ああ、そんなすぐに出てこれへんわね。地面の中から一生 懸命掘って出てくるんやからね。やっとでてこれた。ああやれ やれという気持ちもあるかもしれないね。

はい、邦臣君。

邦臣 やれやれ、と思った瞬間にまぶしさが目に入った。

T ああ。

政義 光を見て、もう春がきたんだな、て思った。

T この光で春を感じた。うーん。あっ春だなって。

大裕 なんかな、太陽とか見て、久しぶりや、て思ってやる。

T この光がね。おっ、哲也君。

哲也 何か気持ちがいい。太陽がまぶしいけど気持ちがいい。 さわやかな感じ。

T わあ、すごいこというね。

このまぶしさが、さわやかで気持ちがいいって。いいなあ。朝子 「ほっ」っていうのは、「ほう、まぶしいんやなあ」って初 めてじゃなくて、「あっ、むかしの時の光だ」て思っ てちっ ちやい「っ」がつけてあるんやと思う。

大裕 今日出てきてよかったなあという感じ。

T はい、じゃ、もう一つ先生聞きたい。

この次にもまた「ほっ」が出てきますね。この「ほっ」とこの「ほっ」の気持ちはいっしょでしょうかね。ちがうでしょうか

C 違う！

T 違う？じゃ、どう違う？

由美子 最初の「ほっ」はびっくりしてるけど、次の「ほっ」は安心している。

T 由美子さんは、二つめのは、何か安心しているみたいって。

C ほれもある。

T もうちよつと詳しく言うてくれる。どうして二つめは安心しているって思ったの。

由美子 最初パツと出た時はお日様がきらっと光ってびっくりしたんだけど、もうほれに少しなれたから、ほっ、て安心したん

T はい、国寄祐子さんはどんなに思った？

祐子 由美ちゃんと似ていて、ほつまぶしいな、の方は、なんかびっくりして、あつと思っただけやけど、うれしいなの方はびっくりするんじゃないかって、なんか、安心している。

T ああ、やれやれ、という感じね。

政義 初めのほつまぶしいな は、春がきて、二番目の方は、なんか、よけいびっくりしている。

T 何？二番目の方はよけいびっくりしている？  
公美わかる？洋志わかる？もういつぺん言うて

優子の読みも認められるだろう。

今まで発言していなかった哲也がいきおいこんで語り出す。政義の発言がきっかけになっているようだ。

「ほっ」の中になつかしさの感情も読み取っている。

新しい読みの視点を与えて、また新たな気持ちで読ませたい、という気持ちでこの問いを出した。

政義は、喜びがだんだんふくれあがっていく状況を言いたいのだと思っただけ止めた。

政義 ほつうれしいなの方がよけいびっくりしている。

T なんてそう思う。

政義 うれしいな、やでな、もう春がきたさかい。

T 今、政義君はこういうこと言うてるのかねえ。

この時（まぶしいな）も、哲也君が言ったようにうれしさはあるね。でも、この時の方がもっと気持ちがふくらんでるみたいな気持ちができる。

勝仁 同じ。

大裕 初めは、まぶしいな、でびっくりして、次は、うれしいなでびっくりしてる。

T なるほどね。

この「ほつうれしいな」はやっぱりじっとして言っているんだろうか？少しこの間に動いているんだろうか。どっちですか

C 動いている。

T うごいている。そうすると、よっこらしよ、と出てきて、そして、うれしいなああって。

直也 ちゃう。ぼくは、初めの二つのほつ、はじっとしてて、

後のほつ、でうごいてる

T だんだん動きだしてるのは同じだけどね。

じゃ、ここでうれしいなあ。で言っているのは、何がうれし  
いなあ、で言ってるんでしょう。どこでうれしさを感じてるの  
でしょう。 線でむすぶとしたら。  
ほつ、うれしいなあ、という気持ちはどこからでてきたので  
しょうね。

和樹 ああいいにおいだ、のどこ

邦臣 大きなくもが動いてくる。

C 水はつるつる 風はそよそよ

T 龍法君は？

龍法 ぼくもそれ。水はつるつる 風はそよそよ

T うーんそうか。よし。

じゃ、どんなうれしさを感じているのかももう少し見ていきま  
しょうね・

水はつるつる。て書いたるでしょ。どういことでしょうかね  
どういうものを見て水はつるつるって言ってるのでしょうかね。

C 水たまり

悟司 水たまり

T 水たまり。水たまりが何でつるつるなの。

悟司 わけない。

明代 今まで土の中にいたけど、地上に上がってきて、水が土の  
中だったら水がなかったけど、地上にあがってきたら、水があ  
ってつるつるしているから

T 水がつるつると光っている感じ

宣彦 太陽が水たまりに当たって鏡のように反射している。

勝仁 あんな、水をさわって見たら、つるつるしてた。

T また、ちがうこと言ったね、

水をさわったらつるつるしていた。勝仁君はそうに考えた。

この問いは、子どもには唐突だっ  
たようだ。問いに答えさせられる  
という感じの展開になっている。

すでにかえるのうれしさについて  
はだいたいつかんでいるのだが、  
より具体的に水はつるつるとか、  
風はそよそよ、などをかえるがど  
う感じているかという読みの方向  
に向けたくて問うた。

ずっとだまっていた悟司がつぶや  
く。

優子 草にしがすがついていて、つるつると落ちていく感じ。

T おもしろいねえ。はっぱに水玉がついていて、それがつるつるとひかって流れる。

朝子 水は、ていうたつて水たまりとはかぎらへんさかい、雨み  
たいなあとの水の玉が何か重くなつてピチャンと落ちてはっぱ  
がはねるみたいな。

直也 はっぱから水玉がおちてきて、それが、かえるにピチャン  
と当った。

T なるほど。おもしろいね。先生はそんなこと思つてなかつた

先生は、なんか、小川がサラサラ流れていくのを見て、ああ  
水がつるつる流れていくなあつてそんなふうに浮かべてたんだ  
けどね。

チャイム

じゃ、きょうはここまでにしておきます。

優子のような読みは全く考えてい  
なかつた。

まだ、取り上げていない部分もあ  
るが読み取りについては一応ここ  
で終えて、次の時間、朗読を中心  
とした学習の中で扱いきれなかつ  
た部分を扱うことにした。

## みんなの感想（二時間学習後）

国寄祐子

私は、「春の歌」という詩を読んで思った。始めこれは、草野さんが書いた詩じゃなくて、かえるが書いたような感じがした。地上に出てきたかえるが、春を見て思つているみたい。土の中は、まっくらでなにもない。そしてちしように出てきて土の中とはちがうものをたくさん見ておどろいているみたい。いままで土の中のおいをかいでいたけど、外に出て、春の空気をすいこんで（ああなんて、いいにおいだろう。）とさわやかな気分になつているみたい。ろろどくで、みんなが読んだ。全員かえるになりきつているかんじがした

前田朝子

私は、この詩を読む前に、（いっぱいいいけんの出そうなお話やな）と思つてたらそのとおりになり  
ました。私はさいごに読んで、「いろいろどくやなあ。」と先生が言つてくれたのでうれしかったし、  
国寄祐子ちゃんのろろどくもよかつたと思う。とくに「ほっいぬのふぐりがさいている」のところ  
みんなのばあい、いっぱいさいているように読んでいたけど、祐子ちゃんはたった一つだけさいてい  
るような感じで、ほつと言つたから、かわいい声できつとそういつているとおもう。

藤田由美子

このカエルは、あたまをだして見回しているようだった。まぶしさにびっくりして、「ほっ」とい  
つたところがとつてもかわいかった。さいしょはびっくりした「ほっ」だったけど次の「ほっ」はと  
つてもよろこんでいる。とくにああいいにおいだというところがよかつた。土の中ではいいにおいが  
しなかつたから地上に出てきて春のにおいがしてうれしだいだろうとおもつた。

さいごに、ケルリンクック、ケルリンクックと二回も書いてあるからとつてもうれしかったんだと  
いうことがわかつた。

国寄智将

ぼくは始め人間がかんじたことだと思つたけどみんなの意見を聞いてかえるがかんじたとわかつた。  
ぼくは、かえるが一番たのしそうな時は土のにおいからいいにおいになったり去年と同じだったから  
うれしかったと思う。この詩でいちばんいいのは、みんなと同じかんじかたをしていたからです。人  
間なのにかえるのかんじたことが分かるからすごいなあと思う。

多喜なつ希

このベンキョウをして、かえるが土の中でどれだけ悲しかったことがわかった。そしてかえるがさいごに「ケルルクック」と言った時、ほんとうにここが一番心をこめてさいごにかえるがいつたのでかえるも人間みたいにいことをいつているみたいでいいと思う。そしてみゆきちゃんのろうどくでごくかんじがあつてうかんできくるのをみんなにつたえていたのでいろいろどくと思つた。

友だちのいけんをきいていたら金子君が「ああいいにおいだ」と言つてからいぬのふぐりがさいている。大きなくもがうごいてくる。と言つてからさいごにまとめてケルルクックとたのしくうれしくいつているみたいと言つた。私もそう思う。そしてゆう子ちゃんのろうどくがすごくかんじがあつてかえるのよに言つていた。

「ほつまぶしいな。ほつうれしいな。」という所をかえるがほつとびつくりしてピョコンととんでいるみたいなきがした。まぶしいな、の（な）がなければ、ほんとうにまぶしいのがわからなかつたと思う。

西山紗織

私は、「春の歌」を勉強してケルルクックという所がとくにかわいかつた。ほつまぶしいな、はじめて土の中からピョコンとかおをだしたからまぶしかつたし、土の中はまっくらだからまぶしいなどかえるはそうおもつていとおもう。次のケルルクックの所は、ああいいにおいだか鼻をピクピクさせている。それに一番さいごのところクックという所はわらつていとおもう。

高田明代

私は、「春の歌」をよんで、かえるが土の中から地上に出てきて、うれしかつたから、この詩を書いたのだなと読んだらわかつた。地上に出てきて、本当にうれしかつたから、その気持ちを書いたんだと思う。わたしが楽しいなあと思つたところは、「ああいいにおいだ」のところかが一番好きだ。「春の歌」というだい名も、この詩に合つていから大好き。これからも、こういう詩を読みたいな一と思う。

廣瀬有香

春の歌を読んで、かえるは、土から出た時、前と同じで、とってもなつかしそうに、「ほつまぶしいな。」と言つたと思う。それと、さい後のケルルクックは、今までのうれしさがあふれてさいごにケルルクックと言つたとおもう。それにケルルクックが2回つづいていたから、ふつうのケルルクックじゃなくて、もつともつうれしかつたと思う

佐藤美由紀

私は、この勉強をはじめたとき、うれしそうなかえるがうかびました。とくに、ほつまぶしいな。というところで、とってもまぶしうだけど、うれしい気もちだと思ひました。このお話のかえるは、とってもやさしいかえるのような気がしました。もし、私がかえるになつたら、もつともつと発見したいな。と思つていました。それにさいごの、ケルルクック、ケルルクックという所が、とってももつともものびのびして、うれしうに飛んでいようなかえるがうかんできました。

もう一ついい所は、みずはつるつる、かぜはそよそよ。というところは、かえるが楽しいな、楽しいなと思つていた

佐藤公美

楽しいところはケルルクック、ケルルクックだった。それに、ほついぬのふぐりがさいている。ほつおおきなくもがうごいてくる。でいぬのふぐりがさいているから、うれしさがたまつてい。だからケルルクックと言つたと思う。びつくりしたところは、ほつまぶしいな、だと思ひ。かえるは、冬しめつて。くらい。でも、春はまぶしい。それで、わたしがびつくりしたより、かえるがびつくりしたと思ひ。

葛本優子

「春の歌」をよんでこんなことを思ひました。かえるがきもちよさそうにいつているよに思ひまし

た。どうしてかというところ、かえるが土の中から出てきてくうきのいいところに出てきてあくびをしているように思ったので、きもちよさそうだなっと思った。わたしは始めよんだりするのいやだなっと思っただけで、いまは、とてもこの詩がすきになった。そして私の一番すきなぶんしょうは、ケルルンクツクの所でした。どうしてかというところ、とてもたのしそうです。それと、ほっとうところで。ぴょうんとびあがっているみたいだからすきです。わたしはこの詩は、とてもすきになりました。まだ「春の歌」のべんきょうをしたいです。

#### 山田政義

ぼくが一番きにいった文は、ああいいにおいが一番きにいつている。ぼくは、ああいいにおいだをたいせつにしていたけど、ぜんぶならうと、一ぱいいところがあったで、この春の歌をならって、いいべんきょうができて、とてもうれしかった。